

もう一つの虫追い

— 福岡県久留米市城島町の平家伝説 —

一 はじめに

平安時代末期、西国を舞台に繰り広げられた源平合戦で平家一門は敗れた。が、実は落ち延びていたという「落人伝説」が各地それぞれの歴史や風土のなかで醸成され、今もなお語り継がれている。九州の福岡県では、北九州市、宗像市、糸島市、筑後市、みやま市、八女市、久留米市、柳川市、うきは市と広範に点在するのだが、特に久留米市瀬下や対岸の佐賀県鳥栖市など筑後川流域^①では、水天宮を中心とした安徳天皇潜幸伝説、平家武将一行の逃亡譚などが散在し、江戸時代からの信仰が確認できる。

今回取り上げるのは、福岡県久留米市城島町の事例である。郷土の昔話集に収録されている「おどり念仏」に注目したのは、登場する白拍子・小菊が発端であった。典型的な語りとしての平家武將の逃走譚、白拍子がもたらした芸能「躍念仏」で鎮魂するという内容であるが、現地調査をしてみると、一見した平

家伝説より「吸い殺し田」と称する異色な主題が強烈な印象として残った。この伝説は、昨今ではこれ自体の所在は薄れつつありながら、辛うじて昔話集収載の再話をもって紹介される傾向が見られる。

ここで注目したいのは、地元の古い記憶で足跡を残す「吸い殺し田」における「登場人物が田に埋められ虫による吸血で苦しみ死ぬ」という描写である。この表現が意味するものは何であらう。そして、このような伝説が生まれたのは何故なのか。この伝承の背景と、人々の受容や信仰について考察したい。

二 再話「おどり念仏」と江上操座

まず、郷土昔話集「伝承と想い出 ふるさと城島」収録の「おどり念仏」を紹介する。概要は以下のとおりである。

景清の身代わりになった平太は田に生き埋めにされ、虫に生き血を吸われ亡くなる。六波羅蜜寺を訪ねた白拍子の

小菊は不思議な夢を見るので相談すると、当地に行くことを勧められ、授けられた空也上人の和讃と魔除け面・鈴を持って筑紫の国江上まで来る。そこで「吸い殺し田」の噂を聞き、父の亡霊を慰めた。このことから、江上の「おどり念仏」と呼ばれるようになり、のちに（大永年間）この話を聞いた領主豊饒美作入道永源が寺田三反三畝を寄進し西法山九品寺を建立、「寺家趾」として残る。

この書を執筆した郷土史家・古賀智勝氏（一九二一年生）によると、「おどり念仏」は地元の言い伝えとして聞いた話を再話したものだという。ただし、ここで語られる話は前代から継承されてきた、というよりは、古賀氏自身が述べているように、自分なりの脚色も加えた「新しい形」のようである。古賀氏とは、氏が逝去する直前の二〇一四年暮れに直接話を伺う機会があったのだが、高齢で昔の記憶が臆なため、ただ「聞いた話を基に書いた」と説明されるだけで、具体的な伝承と脚色部分との違いは確認できなかった。故に、今となつては「景清」伝説や白拍子による鎮魂との関わりなど、細部に窺える平家の落人伝説が、当地城島にどこまで伝わっていたかは不明である。おそらく近隣に存在した「景清」にまつわる信仰を参考に、江戸時代の地誌に記載された「九品寺」や「江上操座と躍念仏」に見られる「鎮魂」を「吸い殺し田」に結びつけたと推察する。白拍子の登場も『壇浦兜軍記』に登場する五条坂の遊君（白拍子）で景清の恋人だった「阿古屋」を意識したものかもしれない

内藤 浩誉



写真 A 江上操座の面と鈴 (境家所蔵)

い。一方、古賀氏は、「江上には小菊の墓があったというが、いつのまにか無くなっていた」という話もしてくださった。「小菊」という女性の真偽は分からないので、まったく創作だと決めつけるには判断がつかない。吸い殺し田伝承より、鎮魂に焦点を当て「おどり念仏」を主眼とした語りとして整えている印象が窺える。

城島町江上の旧家・境家では、歌舞伎傀儡、躍念仏を生業とする江上操座に関わると口伝される「面と鈴」が所蔵されている【写真 A】。これらの遺物は「見ると目が潰れる」と言われていたため、当主・境毅氏（一九四一年生）はあまり詳しいことを聞いてこなかったと述べた。実物を拝見すると、面は男性的な白尉（墨書の髭あり、黒尉より若干大きい）、女性的な黒尉の一对で、それぞれ縦約十センチ、横六センチ、顎部分には切込みがあり動かせるようになっているようだが、覗き見るための目の穴はないので、人間が着けるといふよりは人形用と見るべきであらう。普段は、約二五センチの鈴とともに松鶴模様の漆箱に納められていて、一座に関わる個人名であらう、「奉寄進 明治六癸酉年、竹本村戸太夫、豊澤仲七、吉



写真B 所蔵箱に納められていた墨書布

田三吉」の墨書がある布も残っていた【写真B】。口伝の他にこの遺物からも、人形浄瑠璃の系統が存在していたことが窺える。

当初は現代に脚色された話として受け止めた「おどり念仏」について、江戸時代の文書に記載されている「九品寺」と今は跡地となったその隣接

地に居住する江上の旧家・境家に所蔵され「躍念仏」に關わりと口伝される芸能祭祀具「面と鈴」。そして「吸い殺し田」に窺える非業の死とその症状に、何らかの關係性を見出すことは決して無理ではないと考える。後述する吸い殺し田にまつわる石仏を寺下の九品寺跡に移動させた意図は定かではない。しかし、この辺りに芸能を生業とする一座・江上操座が存在したこと、つまり「鎮魂」との關係は考える余地があると思う。

資料『筑後地鑑』⁴には、①江上村に歌舞伎傀儡及躍念仏を業とする者がおり、②嘉祝弔祭の家にいき、吉事には舞童俳優を、凶事には念仏誦経を専行とした③僧侶に擬した風貌から鉢扣・念仏坊と呼んだ④居処は寺家と名づけた⑤空也上人の流を汲むと伝わ



写真C 田主丸町の虫追い行事 (2019年11月)

いう伝承に基づき、斎藤実盛(サネモリ虫)と手塚太郎光盛(テツカンタロ)の人形を作り芸能化した「虫追い」が行われていた【写真C】。当地では他に、資料『久留米藩公用見聞録 郡方下代』⁷「延享三年」の項に「多擲々吃 波羅跋題 那蛇婆提」の十二字を用いた呪法が紹介されている。直接除去するのみでなく、呪術

(民間信仰)という精神性に寄り添うことで強化しようとしているのが面白い。また、「江上村に限り毎年虫が入るので柳川垂水村の虎之亟という者と呼んだところ、『これは当村先城主の祟りである』と『言うので墓を建てた』⁸と、虫害の因果に祟りを想起する様子が窺えるのは象徴的だ。

後述するが、筑後川流域では田に滞留する人に「吸い殺し田」に見られるような状況が起きていた。原因不明かつ異常な症状の、治療方法も分からない時代、この悲惨な現実、人々にとって大変悩ましかったであろうことは想像に難くない。故に、苦痛を和らげるための切実な祈願、効果の期待として、芸能による鎮魂があったことは想定できる。すなわち、農事儀礼(虫追

る⑥四方を周流し、鉦鼓を打ち、説経念仏と号する躍念仏を行う⑦九月十一日は空也上人往生の日として祭る⑧九品寺(九品宗)は旧洛東六波羅蜜寺の末流である、との記載がある。また、資料『筑後志』⁵や『寛文十年久留米藩寺院開基』⁶では、①三藩郡江上々村の西法山九品寺と号する②江上城の城主・豊饒美作入道永源による草創で、寺田として三反三畝あったが田中吉政によって没収された③空也上人の流を汲む九品宗の徒が守る④村内の歌舞を生業とする人々の存在を示す、と述べられている。

江上操座は、場合によっては他から雇い入れて開帳神事等で芸を披露したことが記録に残る。三藩界限では、早魃の年に操芝居を行うことがあったようで、「久留米藩公用見聞録 郡方下代」⁷「寛政十一年」の項では、虫追いを目的に芝居見世物が催されていたことが分かる。

虫は、農耕従事者にとっては大敵で、作物を守るための「虫追い」は重要な実務作業であり、信仰に結びつく形で発展した農耕儀礼である。虫を払う方法にはいくつかあり、用水に油を入れ取り除く方法、蝗が大きくなると夜分に松明を立て、鐘太鼓等を打ち鳴らす方法(注⑦)「文化六年」の項⁸などが一般的に行われていたことはよく知られている。平家方の武将斎藤実盛に由来する「虫追い行事」は全国的に有名で、かつて松明をかざし鐘・太鼓を打ち鳴らしながら虫を脅して追い払われたというのが、筑後地域でも「斎藤実盛が戦で切株に躓き転倒したため敵方手塚太郎に討たれた、その怨念で虫と化し田を食い荒らすようになった」と

い)における祈願として芝居が興行されていたという実態、「凶事には念仏誦経を専行とした」という目的に照らした芸態などと、「吸い殺し田」という禍々しい場所との親近性は、江上での操座の存在価値を高めたものと推察する。操りでの祭祀道具を「見ると目が潰れる」と言って安易な持出しを禁じる意図にも、より強い神聖視を感じ取ることができるのではないか。

三 「吸い殺し田」伝承と正体

さて、今回主眼としたのは、話の核となる「田に埋められた登場人物が、虫による吸血で苦しみ死に至る」という描写である。この陰惨かつ異色な表現を伴う「吸い殺し田」の話は、古賀氏による再話とは別の形で、地元江上地区の古老から確認できた。具体的に聞いた話を紹介しよう。

一つは、「夫婦喧嘩の末、縛り付けられ動けなくなった女性が蚊に吸われて全身真っ黒になって死んでしまった。大きな堀のあった水門近くの畦道が該当場所である」というもので、語ってくれた一九二九年生まれの男性はこの話を親から聞いたという。

もう一つは、「躍念仏の面」を所蔵する境家に聞いた「悪さをする人を懲らしめるために土中に埋めたら、蛭に吸われて呻きながら亡くなった。その供養のため地蔵が建立された」という話である。この地蔵は、元は深田であった小字「横堀」に立っていたが、一キロほど離れた九品寺跡(寺下)に石仏をまともる形で移



写真 F 宇田貫川（用水路）



写真 G 「吸い殺し田」比定地

「腹っぱり」の家臣とのやりとりを記載する『甲陽軍鑑』が記録の始めとされ、中世にはすでに人々を苦しめていたことが分かる。「水腫脹満、茶碗のかけら」（水腫脹満となった者は茶碗のかけらと同じで役に立たない）と言われ、江戸時代初期には甲府で「水腫脹満の妙薬」なる民間薬が多種売られたが治るには至らず、その症状の苦しみや恐れを窺わせる俗謡や格言が残っている。例えば嫁入りする娘の悲運や覚悟としてそれぞれ実在の地名を組み入れながら、甲府では「中の割にお嫁に行くなら 持たせてやるぞえ 棺桶に経帷子」「龍地団子に嫁に行くには 棺桶を背負っていけ」、備後では「神辺に行くには 棺桶を担いで行け」と伝わる。また

たとえば、再話「おどり念仏」傍線部のくだりは、脚色された内容とは言え実際に人々が体験してきた実態が反映されているように感じる。また、聞き取りでも、田に放置され吸血された女性性は「全身真っ黒になって」つまり変色して死に至ったと伝えられていたことは、先述のとおりである。

この表現に注目し調べてみると、似た特徴が窺える風土病に行きついた。すなわち、筑後川流域など全国でもある特定地域で人々を悩ませた「日本住血吸虫症」である。

リアになり、人間や動物の皮膚から侵入、血管の中に寄生する。それにより、痒み、だるさ、水腫脹満、肝硬変、脳梗塞など、肝臓や脳に重篤な障害をもたらした。症状としては臨月のように腹が膨れ、皮膚は黄色がかり、痩せ細って皺が寄る。必ず死に至るわけではないが、腹が大きくなると死期が近いとされた。永らく正体不明の病として農村部で人々を悩ませたこの病の解明から撲滅までの経緯は、『死の具』^⑩に詳細がまとめられているので、以下参考にしながら日本住血吸虫症について述べる。

これらの事例から、再話の「田中の人間が吸血によって死に至る」という異様な部分は、古くから伝承されてきたものが反映されたと思われる。また、「吸い殺し田」は、平野部にあたる江上と六町原の境界、宇田貫川（農業用水路）脇に比定されるということであった【写真 F・G】。基盤整備実施により現在では変わってしまったというが、かつては深田で特に気を

付けねばならない場所だったという。

何故「吸い殺し田」伝承は生まれたのだろうか。背景にある因果関係について考察したい。

虫との向き合い方とその対処法には、風土性が窺える。ここですらに着眼すべきことは、害虫「ウンカ」とは異なる性質かつ描写、すなわち吸血虫の存在である。伝承に表れた吸血の表現から実態を繕いてみよう。



写真 D 九品寺（廃寺）跡〔久留米市城島町江上〕

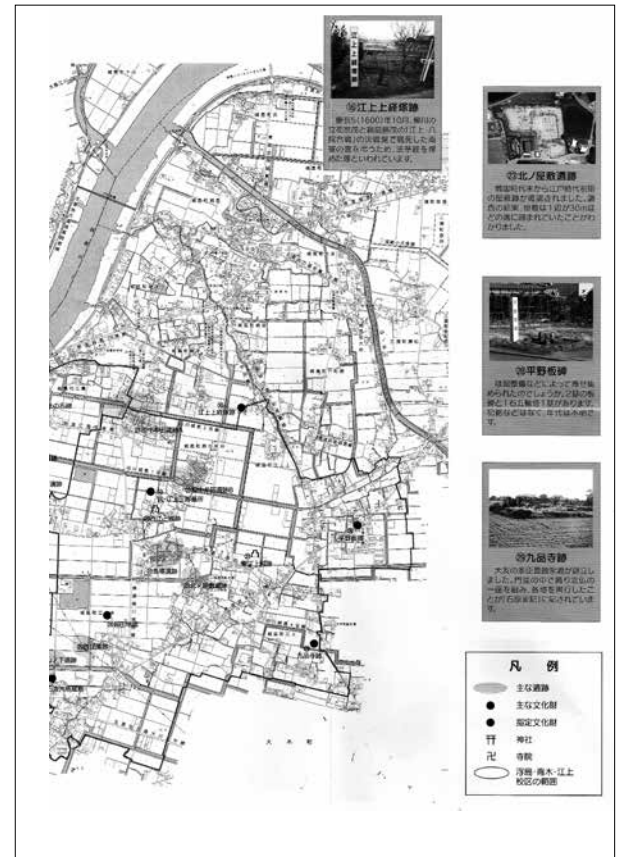


写真 E 城島町「浮島・青木・江上校区の文化財マップ」

病の原因について、甲府では飲料水に毒が入っているからと疑い、「嫁には嫌よ 野牛島は 能蔵池の葦水飲む辛さよ」「故郷でも嫌だ 野牛島の能蔵池 葦水飲む辛さよ」と伝えられていたり、「片山病」と呼んでいた備後では「大昔、漆を積んだ船が嵐の日に片山の麓で転覆した。その時の漆の毒気が今も残っている。それが片山病である」という言い伝えに基づき発症は「漆の毒に当たったから」とされていた。このように古来から重大かつ深刻な原因も治療方法も不明な奇病として認識されていた水腫脹満の病は、近代に入り世界で最初に日本住血吸虫を発見した桂田富士郎博士によって正体が判明するが、未だ根治につながる手がかり——中間宿主は見つからなかった。

しかし、それもある研究者の功績により光が差し込む。宮入慶之助（一八六五—一九四六）である。宮入は、ドイツで細菌学を学んだ後に、日本人の劣悪な栄養状態を改善するため寄生虫学を専攻した。九州帝国大学（現・九州大学）に赴任していた一九一三年、筑後川沿岸の現地調査と実態把握に乗り出し、「マンブクリン（久留米での通称）」の感染初期に足がかぶれる「肥え負け」について「長年肥えをしやっていたのに水につかると必ず肥え負けする溝渠があり、『有毒溝渠』と呼ばれて恐れられている」と聞き調べたところ、名もなき巻貝を多量に採取した。発見したこの中間宿主貝（ミヤイリガイ／*Oncomelania hupensis nosophora*）から感染経路を解明、日本住血吸虫症の制圧に導く手がかりを得たのであった。

で泳ぐなど言われていた」と口々に上ったという。

感染回避が意識された一方、筑後川流域ではかつて宮入貝に關する独特な信仰も見受けられた。福岡県久留米市宮の陣の宝満川河岸には、生息最終確認地の記念として「宮入貝供養碑」が建つ【写真H】。人為的に撲滅した貝の供養を兼ねるのだが、興味深いのは、隣接地の字荒瀬には住血吸虫を「神体」とする「宝満宮」という祠が存在した点である。ここは日清戦争中、地元若者が徴兵検査を免れるために信仰していたそうだ。「洪水直後の水がやや引いた宝満宮の周辺を裸足で参拝すれば、靈験が得られ戦争に行かずに済む」という迷信が流行し、成人男性に義務付けられていた徴兵検査で身体頑健を示す「甲種合格者」は出なかったと言われているという。宮入が助手



写真H 宮入貝供養碑【久留米市宮の陣】

の鈴木稔とともに中間宿主を発見するに至ったのも、荒瀬では日本住血吸虫を神と崇めていたという話を聞いたのが契機であった。撲滅された今ではこの信仰も過去のものの、筆者も宝満宮を訪れようとしたが、地元の方

ミヤイリガイが何故日本国内の限定された地域にしか存在しないのかは判明していないとのことだが、棲息地はいずれもきれいな水の場所かつ洪水発生地にあたり、洪水がミヤイリガイの生息地を広げたと考えられた。撲滅に向けた対策、すなわちミヤイリガイが棲息できないようにするため、各地では殺貝剤の使用の他、田畔（用水路）をコンクリート溝渠化するなど地域環境整備が図られ、かつ高密度で生息する筑後川とその支流の宝満川・新宝満川では「筑後大堰」の造成を行った。結果、筑後川流域では一九九〇年、安全宣言が出されるに至る。世界に先駆け病の根絶に尽力した宮入慶之助の業績は、医療や公衆衛生にとって世界的貢献を果たしただけでなく、居住環境や生業・生活史、生態系・生物学としても看過できない。

久留米市内で住血吸虫症について伺ってみると、中年以上の人々は記憶や聞き伝えの話で認知されていた。子供や老人、体力の弱い時に症状が出て来たり、肝臓の病で亡くなることが多かったという。城島町でも、ミヤイリガイについて「小指の先ほどの小さな小巻貝で、川辺や溝の草の根についていた」と教えられた。現在では「皮膚から血液に入ると恐ろしい」と弊害について周知されているが、原因不明の時代にも川や田に入ることに対しては強く注意を促されたそうである。現在素掘りの水路はないが、かつて筑後川沿いでは「素足で田んぼに入るな」と言われたが、長靴を持っていなかった（一九二五年生の男性、鳥栖市下野）、「ちっこ」（久留米の俗称）の人は、子供の頃は川

が存在すら知る者はおらず、風化している様子であった。健康長寿は人間の普遍的祈願である。ならばこそ、病に罹ることを願うという矛盾にどのように向き合うべきなのか。時代に抗えない若者が戦争における一つの駒となることを忌避しようとするその行為に表れた切願を見つめてみたい。風土の特性と結びつき受け止められていたそれらも、振り返るべき歴史の一齣なのである。

四 おわりに

福岡県久留米市城島町の「吸い殺し田」伝承は、筑後川流域での「虫」との向き合い方に風土性が窺える事例といえる。全国的な分布を見せる害虫を追い払う農耕行事「虫追い祭」、稲を食い荒らす害虫「ウンカ」とは異なる、「生き血を吸われ苦しむ」という伝承が生成した背景には、症状が再話「おどろ念仏」の描写に似た風土病「日本住血吸虫症」を想定した。永らく原因不明で苦しんだその病に「祟り」を見出し、鎮静化に向けては「躍念仏」という芸能が機能したであろうし、その主体となった操座の存在が当地では確認できる。

二〇二〇年、世界的な猛威を振るう新型コロナウイルス（COVID-19）や、大陸間を飛来し作物を全滅に追い込むほど食い荒らしている飛蝗問題に、人類は頭を悩ませている。自然の猛威に対して人間の立ち向かい方が問われる事態であり、新しい価値観に根差した生き方が求められる中で、過去の感染症や自然災害など

から改めて学ぶことは多い。

地域独特の「吸い殺し田」の伝承は、もはや知る人に限りがある一方で、脚色を加えた再話が書物に収録された形の平家落人伝説として受け止められているようである。伝説を語る上で原風景の変化に加え、生物がもたらす病に対する危機感が病の撲滅に伴い薄れ、記憶と信仰は風化しつつある。

不可思議で奇異かつ恐怖を呼び起こす自然の異変に対し、人々是如何に向き合ってきたのか。地域によって歌であったり物語であったりと方法は異なるが、伝承には変わらない心情、祈りが籠められている。知恵と教訓の宝庫として歴史を俯瞰すると、今は根絶できた病であっても、かつて苦しみの中に乗り越えようとした人々の思考や対処方法に注目せずにはいられない。今こそ七転八倒の経験を活かすために、埋もれつつある過去やその伝承に目を向けることが求められよう。先人の苦悩と努力が籠められた郷土史、そして食糧増産のため安心して農業を行えるよう日本住血吸虫症の克服を第一課題として目指した戦後を振り返るとき、「吸い殺し田」の悲劇は忘れてはいけない記憶として語りかけてくるのである。

注

(1) 筑後川界隈の平家落人伝説は、久留米市では洗町、荒木町、大橋町、京町、草野町、篠山町、大善寺町、田主丸町、長門石町、山本町、瀬下町に点在する。具体的には、〔福岡県久留

米市〕〔瀬下町〕には、按察使局伊勢（剃髪後は千代）が安徳帝と二位殿を祀り一門の菩提を弔った水天宮、境内には千代を祀る尼御前神社が鎮座する。この宮は、元は鳥栖市下野町の鷲野ヶ原にあったが、洪水の度に漂着した由縁で移転したと伝わる。その対岸の〔佐賀県鳥栖市〕〔下野町〕では、潜幸し崩御した安徳帝を祀る下野水天宮、安徳帝の子榮尊國師が唐から持ち帰った狛犬一對を奉納した老松神社、安徳帝御陵の天神社、二位尼信仰の薬師如来を安置する薬師堂、二位の尼が念仏三昧で往生を遂げた通善寺跡、平知時や源平戦没者の墓、安徳帝一行が到着した「御乗越」、潜幸地の「宮屋敷」などの地名が残る。

(2) 「おどり念仏」

江上の里に「吸い殺し田」という所があります。どうしてそんな恐ろしい名前が残っているのでしょうか。今から七百年も昔、源氏と平家が家門の興亡をかけて壇の浦という所で最後の決戦をしました。はじめは勝いくさだった平家も潮の流れに乗った源氏の激しい攻撃に敗れて哀れにも幼い安徳天皇を始め一族残らず波に沈んで亡びました。平家の陣中に悪七兵衛景清という侍大将がいました。全盛の頃は都を警備する重い役目の武将で武勇の誉高い豪傑でした。壇の浦で大きなたを振り廻してまるで鬼神のような奮戦をしましたが流れ矢に眼を射ぬかれてどつと小舟の中に倒れ気を失いました。

栄枯盛衰は世の習とはいえ哀れにもはかない平家の末路をいたむ声がここ江上の里にも囁かれる頃、有明の海から筑後川をさかのぼって筒江の葦野に水びたしの小舟が流れつきま

した。盲目となった景清と郎党の堺の平太が人目を忍んで乗っていました。戦に勝った源氏は平家の落武者を捕えるために那須の大八を大将に大勢の追手をさしむけました。景清は今はいまでも覚悟をきめて切腹しようとしたが郎党の平太が「この場は私が身がわりになって防ぎますからこれを着て逃げて下さい。」といってぼろぼろの乞食の着物をさし出し、自分が景清の衣服をきて「平家の侍大將悪七兵衛景清ここに在り。」と叫んで斬り込んでいきました。その間に景清は杖を頼りに日向の国へ落ちていきました。やがて平太は捕えられて偽者とわかると怒った追手は平太を裸にして田んぼに生き埋にして立去りました。生き埋にされた平太の体には「ヒル」や「クチナワ」や「ヤブカ」が生き血を吸いにむらがりました。平太の苦しうめき声が七日七夜もおそろしくも恨めしげに聞こえました。このたんばに怪しい出来事がおき始めたのはそれからだといひます。田植の娘さんが急に大熱を出して気狂になつたり、稲刈をしていたお百姓が突然雷にうたれて死んだり、子供が泥にすべつて大けがをしたり、「イナゴ」の成群が襲つたり、雨の夜は鬼火が燃え風の夜は恨めしうめき声が聞えたりしました。村人達は平太のたたりだと恐れて亡霊をなぐさめるためにいろいろ供養しましたがききめはありませんでした。

その頃京都東山の六波羅蜜寺を訪ねた白拍子がありました。この寺は空也上人という偉いお坊さんが仏の教をひろめるために建立された寺で平家の信仰があつく平家が亡んでからは訪れる人もなく荒れ果てていました。この白拍子は堺の小菊

といつて父は小菊が幼い時、主人の供をして戦に出たまま討死したと聞かされ供養のためお参りしていたのです。小菊はこの頃不思議な夢を続けてみるのでお和尚さんに尋ねてみました。その夢は父が生き埋にされてなぶり殺しにあつてゐる夢でした。お和尚さんは可哀想に思い筑紫に行つて父の亡霊をなぐさめてくるがよいと言つて空也上人の和讃を教へ魔除けの面と鈴を与えました。小菊は喜んで都をあとにはるる西海の果筑紫の国江上の里についた時、おそろしい「吸い殺し田」の噂を聞いたのです。それは夢にみた父の最後とそっくりでした。小菊は田んぼのあぜにたつて「お父様」といつて泣きました。そして涙ながらに面をかぶり鈴をふつて和讃をとなえました。「三界広けれど来り留る処なし、四生の形は多けれど生じて死せざる体もなし、三界すべて無常なり四生いづれも幻花なり」小菊のとなえる和讃の声は美しくも又あわれをさそい案内してきた村人達はもらい泣をしながら「ナムアミダブツ」と合掌しました。小菊は近くに庵をむすび髪をおろして尼になりました。不思議な事にそれからあの怪しい出来事は嘘のようになくなりました。村の人達は小菊を仏様のようにながめ、不幸があつたり困つた事が起ると小菊を呼びました。白拍子の小菊は舞が上手でしたので和讃に舞の手をふりつけて踊りました。これが評判になつて弟子になる人も出来て江上の「おどり念仏」と呼ばれるようになりました。のちに（大永年間）豊饒美作入道永源という領主がこの話をき、寺田三反三畝を寄進して西山山九品寺をこの地に建立したと記録にあり今もなお「寺家趾」として残っています。

古賀智勝『伝承と想い出 ふるさと城島』一九七九 自費出版

(3) 古賀智勝「歴史資料 江上の踊り念仏」

(前略) 江上の踊り念仏については、吸い殺し田の由来を聞いた時から、この伝説・民話を文章にして残すなら、歴史から見た裏付けが欲しいと思った。九品宗や空也上人のこと、豊饒美作入道永源のこと、念仏踊りの動作、などは資料が手に入り易いが、悪七兵衛影清（ツバ）となると首をかしげたくなった。宮崎市の生目八幡宮で、壇の浦から宮崎までの逃亡道順を調べたがなかなかわからない。しかし隣町大木の八丁半田付近に戦前まで祈禱師をしていた人が影清を祀っていたと言ったことを聞いて尋ねたが、本人は死に家族は行方知らずだった。その頃、江上氏について調査していたので、平家とのかかわり、境・酒井・坂井・堺氏などの系図を念頭におきながら、物語を組立てた(伝説 おどりの念仏)。

城島文化協会郷土文化部『城島むかし 城島の歴史・伝説・民話・随想集』一九九二

(4) 『筑後地鑑』

一 同邑(注：江上村)の舞妓傀儡及躍念仏
同邑に歌舞伎傀儡及躍念仏を業とする者あり。幾ど十家に及ぶ。嘉祝弔祭の家に引き古事には舞童俳優を専とし、人をして願を解かしむ。凶事には念仏諷経を専とし、人をして感を起さしむ。其体凡俗にして、而も或時は衣冠を帯びて、郷士を形容し、或時は編綴を着て、僧侶に準擬す。故に其居処を名づけて寺家と曰ひ世俗呼びて鉢扣と曰ひ、念仏坊と曰ふ。

(5) 『筑後志』卷三

武藤直治・大庭陸太『校訂筑後地誌叢書』一九二九 筑後遺籍刊行会

九品寺 三藩郡江上川上村にあり。西法山と号す。後柏原帝の御宇、天永年中大友の家臣、豊饒美作入道永源草創し、寺田三反三畝を附す。田中吉政、其田を没収せり。九品宗の徒これを守る。此邑に歌舞業とする魔人（魔人）等あり、世に寺家或は寺中と称す。其本、九品念仏の余習にして、空也上人の流を汲む者なり。案ずるに、永源当刹を草創するの縁に因りて、彼の魔児の輩を爰に移すものか。尚ほ金中山律同寺の條下を照考すべし。
杉山正伸・小川正格『校訂筑後志』一九七四 久留米郷土研究会

(6) 『寛文十年久留米藩寺院開基』

【九品宗】(一簡寺) 覚

一 寺社領、公義并何之代より附来候哉、又は領主より被附置候哉之事

三藩郡江上々村西法山九品寺、寺領三反三畝、豊後大友義隆公御家老豊饒美作入道永源御附被成、其後、田中兵部様御代被召上候由申伝候

一 寺社古跡・新地、何之代より開元建立并再興候哉之事当寺大水之比、右豊饒美作入道永源御建立被成候由申伝候。当年迄百四拾年余罷成候由申候。其後、従門徒中、度々再興仕候一寺社祭祀之規式并時分之事
当寺霜月十五日空也聖人法事仕候(中略)
一 寺社仏体・神体并其寺内末寺、是又仏体・神体之事
当寺開山空也上人絵像并本尊薬師木像一体、当寺末寺無御座候(中略)

寛文十年戌九月十五日

三藩郡江上々村九品宗
九品寺生空

稲次八兵衛殿

有馬主計殿

古賀正美解説、古賀幸雄編・校訂『久留米史料叢書七 寛文十年久留米藩社方開基』一九八一 久留米郷土研究会

(7) 『久留米藩公用見聞録 郡方下代』

●一 小見世物義ハ以前より開帳神事等の節相願来候類ハ、力武・江上操座等にて他方より人数雇入不申、随分手軽二相催、(中略)

十一月二日

右一通寛政十一未年十一月九日、表方右近様より加藤喜兵衛殿へ御渡ニナル。

●大目付え

一 在々において神事祭祀の節或ハ作り物虫追風祭など、名付、芝居見世物同様の事を催し、(中略)

六月

右の通可被相触候

右従公儀の御触書 寛政十一未年七月廿五日右近様御渡。

●一 三藩郡江上々村孫左衛門掛へ同繰座のもの四五人相雇、明後十四日天気次第、一日百姓とも遊樂仕度旨申出候付、例の通受持中承届の段申渡候

同年(注：寛政十年)十一月十二日 鶴飼 薨

吉田式衛様

●文化六巳年

一 新庄組村々田方、当夏稀成旱魃ニ付全千付畝ニ相成、虫取除不行届先達て降雨用水も相増候付追々油を入取除候得共、孰実ニ相掛候付等を入存分取除候義も出来不申、無撓油ヲ入、株毎ニ槐杯ニて操掛取除居候得共、太夕相成蝗除り兼、近々村々共株腐相増候間、組方一同夜分松明を以焼立見候て相除り候義も可有之、只今の通ニてハ次第二虫障りニて柄痛相増可申心遣二候間、人別一ト方角宛二一同ニ松明ヲ挑焼立度候。勿論用水も外シ候時候二候得とも、養水も引受油ヲ入精々取除居候へ共除り兼候間、無撓右体申出候儀ニ付、両三夜右の主旨を以取除見申度候。併鐘太鼓等相用ひ候義ニても無之、人々持掛りの坪々一同ニ松明を振候迄ニて候得共、大

勢組中罷出、村切同夜ニ取斗候義ニ付願出候由。尤其の間ハ庄屋・村役人罷出才判仕候義ニ候へ共、大庄屋儀も打廻、松明の火粗末等不仕様氣を付ケ才判為可申候間、明朔日より三日の夜迄虫焼被仰付被下度旨願書新庄大庄屋差出候付、早崎氏へ差出候処承届候段被申聞候付、村々不メりの儀等無之様才判可被致旨新庄大庄屋へ書渡候事。(中略)

●延享三子二月上ノ間書留ニ有り。

多擲々陀 波羅跋題 那蛇婆提

右十二字を清き水三種壺升入、指にて二十一遍書、何石も一ツニませ時候得ハ虫付なし。享保十七子年西国・四国稲二虫付、悉く喰からす所多キ時、安房国ニも虫付けるに此法をなしける。八月ノ中なりしに水に書てかけけるに虫消失せし也。右稲次御氏御渡被成候事。

●豊田丈助解説『久留米藩公用見聞録 郡方下代』一九七四井上農夫

(8)

『石原家記』

●当年大旱魃四月廿三日雨降己後五月中無雨六月夕立少々あり三瀧郡筋は六月十四日初四月廿三日より己来に雨有七月中に二度雨有八月十一日大雨土居崩程の大雨あり堀々のせき歩行渡する故池深むる三瀧筋古来より堀池深る程旱魃当年始也六月十四日為雨乞願成就愛宕山神前にて番僧の家を樂屋にして操芝居有り^{分徳}大夕立雷強相止翌十五日又々致答の処久留米其外見物殊外夥敷山上に人居余り程故相止

●江上々村荒人神祠建立の事例年江上村の田畑余村に入組候

田畑も江上村分に限年々虫入余村決て虫不入年の江上村分は虫入に付柳川垂水村虎之亟と申取出の者を呼考させ候虚是は当村先城主のたゝりなりと申出其墓を吟味致候処(後略)

石原為平『石原家記』上巻 一九七三 名著出版

(9) 久留米市田主丸町では、伝承保持のために現在でも三年に一度イベントとして実施する。近年では二〇一九年に開催された。

(10) 小林照幸『死の貝』一九九八 文藝春秋

(11) 川野和樹「宮入館長の熱い思い」宮入慶之助記念館「宮入慶之助記念館だより」二六号 二〇一八

(12) 『死の貝』によると、日本住血吸虫症の正体が判明してから、この靈験も色あせ宝満宮は寂れたという。

(13) 宮入慶之助記念館「宮入慶之助記念館だより」一四号 二〇一

参考文献

塘普「病原体発見までの歴史」九州環境管理協会編『筑後川流域における日本住血吸虫病撲滅史』一九八六 水資源開発公団

石井明「日本における住血吸虫研究の流れ」宮入慶之助記念誌編纂委員会編『住血吸虫症と宮入慶之助―ミヤイリガイ発見から90年―』二〇〇五 九州大学出版会

文化観光部文化財保護課編『浮島・青木・江上校区の文化財マップ』久留米市

(ないとう・ひろよ／國學院大學兼任講師)

毛越寺延年における深草少将伝説成立とその独自性

篠原 順子

はじめに

小野小町は、平安時代の歌人であり多くの伝説を各地に残す人物であるが、その人物像は、小町歌の十八首のみにあると言っても過言ではない。小町伝説の中に位置づけられる深草少将伝説は、明川忠夫が、能「通小町」「卒都婆小町」と深い関わりがあると指摘する¹⁾。

岩手県平泉毛越寺には、一月二十日に「二十日祭」という延年が伝わっている。現在は「卒都婆小町」という演目は行われていないが、かつて取り行われていた時の詞章が残っている。本田安次は、詞章や所作を克明に聞き書きしている。その内容を見ると、能「卒都婆小町」と能「通小町」を重ねたような内容と伺え、そこに見られる深草少将伝説は、独特のものともみられる。延年「卒都婆小町」という演目の詞章としてでもここに残り引き継がれていくには理由があるのだろうか。

ところで、能「通小町」の形成には三段階がある。申楽談儀によるとAの唱導僧が書き、多武峰で金春権守が演じた能「四位少将」³⁾。次に、Bの観阿弥が改作した能「四位少将」。そして、Cの世阿弥がそれを改作した能「通小町」である。また、能「卒都婆小町」は、能「小町」に、能「四位少将」から百夜通いの部分を取り込まれたと、伊藤正義は『謡曲集』で述べている⁴⁾。内山美樹子が「通小町」と毛越寺延年(卒都婆小町⁵⁾)で、延年「卒都婆小町」は、Aからであると示し、百夜通いについては最初から取り入れられていたと述べている。執筆者も、延年「卒都婆小町」は、Aからであると考え、百夜通いについては、Bの観阿弥改作時であると考えており、内山とは違う見解を持っている。本稿では、深草少将伝説に焦点を当て、その伝説を考察し、平泉に残る延年「卒都婆小町」の中の深草少将伝説の成立と独自性を見出したい。そして、京都の伝説を見ていくことで、深草少将伝説成立へのB観阿弥の関わりに向けての展開に考察を進めたい。